

公開講座2018報告

2006年より開催してきた「公開輪読会」は、昨年の2017年度より「親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座」という名称に変更し、「どなたでもご参加いただける連続講座」という基本姿勢を受け継いで、本年度も開催した。

本講座は年度ごとに共通テーマを定め、これに関わる問題を各研究員が、それぞれの研究領域から講義するものとなっている。本年度は2018年12月6日から2019年2月28日にかけて、3名(各4回・全12回)の研究員が担当した。毎回、年齢や立場を問わず、仏教や真宗に関心のある多くの方にご参加いただき、質疑応答も活発に行われるなど、当センターと参加者との交流の場となった。

本年度の共通テーマは「語る／語られる仏者—伝承から読み解く仏教思想—」とした。インドの釈尊から、宗祖・親鸞や清沢満之を経て、今日へと至る仏教の歴史は、教えが伝承されてきた営みでもある。その伝承の営みとは、仏陀・菩薩や高僧をはじめとする多くの仏者の存在とその教えがあり、そしてそれらが後代に語り直される過程でもあった。「語る仏者」と「語られる仏者」の両者に留意して仏道の伝承を読み解く試みが本講座である。

本年度は、このような視点によって、真宗学・仏教学、そして近代日本仏教の領域からそれぞれ三つの講座が開かれた。それぞれの担当研究員から、その一部をここに報告する。(※なお、研究員の肩書は開催時のものです。)



公開講座の様子

仏法が伝承される歴史空間

— 第一結集と『大智度論』 —

親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰

釈尊最晩年の旅と教えを記録する初期經典の『涅槃経』には、仏滅後を念頭においた弟子たちへの教誡きょうかいが多く見られる。その中には、例えば次のような言葉があることが注意される。



「修行僧たちよ。それでは、ここでわたしは法を知って説示したが、お前たちは、それを良くたもって、実践し、実修し、盛んにしなさい。それは、清浄な行ないが長くつづき、久しく存続するように、ということをめざすのであって、そのことが、多くの人々の利益のために、多くの人々の幸福のために、世間の人々を憐れむために、神々と人々との利益・幸福になるためである。」(中村元訳『ブツダ最後の旅—大パリニッバーナ経—』岩波文庫、95～96頁)

このような言葉を残し、釈尊は入滅された。その後、仏弟子たちは、釈尊が40余年にわたって説いた法と律の存続を願い、入滅の地クシナーラから再び王舎城へと場を移して第一結集を開催したのであった。釈尊が入滅して自由になれたと言った比丘の発言や、リーダー亡き後に教えやサンガうんさんむじうは雲散霧消するであろうという外道から発せられた言葉を受けて、500人の仏弟子たちによって開催されたものである。ここに仏道が伝承されていく一つの基点を見ることができる。

本講座では、共通テーマに掲げた「伝承」という言葉を受けて、第一結集の開催へ至る経緯やその内実の確認を行った。第一結集の様相については、律蔵に詳しく記載されるほか、龍樹の著作として伝えられる『大智度論』の中で「如是我聞」を注釈する箇所にも結集伝承が言及されている。大乘經典が「如是我聞」から開始されることの意味を探求するうえでも、一体あの時あの場で何があったのかを読み解いていかなければならないと思う。このような視座から、「第一結集へ至る経緯」(第2回)、「結集主催者・摩訶迦葉まかかしょう」(第3回)、「『大智度論』の結集伝承」(第4回)などのテーマで、仏法が伝承された歴史空間を探った。

教育者としての井上円了・清沢満之

親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉

井上円了と清沢満之は、共に東本願寺の留学生として東京大学で学び、それぞれ哲学館（東洋大学）と真宗大学（大谷大学）の初代学長となった。本講座では、この二つの学校の創立理念を明治期の東本願寺の宗門教育の在り方を踏まえて考察したが、その際特に注目したのが、東本願寺留学生の中から立ち上がった新たな学校設立の計画であった。

近年発見された井上円了の東本願寺に対する上申書の下書きの中で、その計画が素描されている。それによれば、近代日本において仏教を復興するには、「自教を研修する」ことを目指した「内務の事業」に加え、「自他の関係を論究する所謂外務の事業」が必要であるとされる。そして「外務の事業」としては、「宗教と道德との区別」、「宗教と理学哲学との異同」など、八条の項目が求められ、それを研究・教授するための学校（「哲学館」・「仏教館」）を本山の経営の下、設立すべきであると提言されたのである。

この新たな学校経営の希望は、本山によって認められることはなかった。しかしながら、そこで目指された理念は、まずは明確に井上円了の哲学館の設立に受け継がれることになる。また、清沢が学長をつとめた真宗大学の創立理念も、明治期の東本願寺の宗門教育と、その中から出てきた留学生たちの新しい学校設立への希望という歴史的経緯から見ることによって、一つの明確な流れを押さえることができる。特に東本願寺では、伝統教学に加え、たえず「余乗および哲学」を教えることの重要性が指摘されてきた。実際、東京につくられた真宗大学は、「自己の信念の確立」の上に「自信教人信の誠を尽くす」ことを理念としたが、そのカリキュラムでは「余乗および哲学」が重視されている。

このようにして本講座では、東本願寺の留学生たちの計画の延長線上において哲学館と真宗大学の創立理念を見ることによって、この二つの学校が共通の課題意識をもちつつも、その実現のための足場を異にするという側面を明らかにした。



親鸞が語る曇鸞

—『高僧和讃』を中心にして—

親鸞仏教センター研究員 青柳 英司

現代において親鸞は、最も「語られる仏者」の一人である。しかし親鸞自身は明らかに、「語る仏者」であった。特に中国・南北朝時代の仏教者、曇鸞に対する注目は、親鸞思想の特徴の一つと

言っても過言ではない。親鸞の主著とされる『教行信証』の中で、最も引用量が多い論釈は曇鸞の著作である。また、本講座で取り上げた『高僧和讃』においても、曇鸞の和讃は最も数が多い。しかも、その内容には伝記的な記事が多く、親鸞が曇鸞の思想だけでなく、その生涯にも着目し、顕揚しようとしていた様子が窺える。

しかし、親鸞の直接の師である法然は、周知のように「偏依善導一師（偏に善導一師に依る）」の人であった。もちろん曇鸞は浄土五祖の第一祖に数えられるが、法然の『選択集』は大半が善導の著作から構成されており、曇鸞著作からの引用文は極めて少ない。では、どうして親鸞は、曇鸞に注目することになったのだろうか。この問題に対して、親鸞は法然・善導の系統を捨てて曇鸞に依ったという、二者択一的な考え方は適切でない。『教行信証』には善導著作の引用も極めて多く、また親鸞は晩年に至るまで、師・法然を敬愛している。むしろ、善導・法然が示した本願の思想を深めていくためには、曇鸞の教学に依る必要性があったのだと思われる。

事実、曇鸞の和讃には「本願円頓一乗」のように、直接は曇鸞の著作に還元できない表現も見られる。また親鸞が曇鸞に着目していく背景には、兄弟子である隆寛の影響があった可能性も指摘されている。そのため本講座では、単に和讃の言葉を『論註』の文脈に戻して解説するのではなく、親鸞が曇鸞の思想に着目する契機となった当時の思想状況なども視野に入れながら、曇鸞の和讃を読み進めた。

